

見いっけた

令和3年度
立山町立釜ヶ淵小学校
第1学年 学年だより
10月号

ちびっ子ハンターがいっぱい！

学校の中に、子供たちのお気に入りの場所が、いくつかあります。

どこか想像してみてください。

まずは、グラウンドや体育館です。思いきり体を動かすことができますからです。次に、図書室です。大好きな本を借りることができるからです。さらに、学校農園です。毎朝、自分たちの野菜の様子を確かめに行きます。お世話も忘れません。最後に、特別なお気に入りの場所があります。それは、中庭です。朝や大休憩、昼休憩等、ちょっとした時間があると、ほとんどの子供たちの遊ぶ姿が見られます。

一体、何をしているのでしょうか。

それは、虫捕りです。朝一番から、虫捕り網を持って、「いたいた」「あっちに行ったぞ」等と叫びながら、子供たちは花壇の間や木々の間を夢中になって走り回っています。初めは学校にあった網だけだったのですが、足りなかったからでしょうか。今では、家からも持ってきたことで、あちらこちらで網が見られるようになりました。朝の時間だけでもう十分かなと思いきや。大休憩になったとたん、教室はもぬけの殻に。オニヤンマやイトトンボを追いかけていました。秋冬野菜の種を蒔いてからは、獲物は、モンシロチョウに。大切な自分たちの野菜を食べられないようにと、学校農園に行って、畑中を追いかけてまわしていました。一匹のチョウチョに群がる子供たち。大騒動です。そんな子供たちをしり目に、チョウチョは子供たちをからかうかのようにひらひらと舞って、隣の田んぼに逃げていきました。



10月に入って、1年教室には新たなお客さんがありました。このお客さんが登場した朝、虫かごの周りで興奮しながら、子供たちが話し合っていました。「何で虫かごの中に、カマキリが入っているんだよ」「変じゃない。虫かごはしまっているのに、カマキリが入っている」「どうなったんだよ」夏のノコギリクワガタに次いで、オオカマキリがやってきたからでした。それからというもの、チョウチョやトンボ等のカマキリのえさを求めて、学校の周りを駆け回るちびっ子ハンターたちは、さらににぎやかな毎日を送っています。

子供たちが捕まえたえさを虫かごに入れると、あっという間にそれを食べるカマキリ。その様子を見ながら、驚く子供たち。弱肉強食の自然界の掟を目の当たりにして、チョウチョをかわいそうと感じたり、カマキリの強さに憧れたり、自分の目でしっかりと見ながら自然界の厳しさを学んでいるようです。

先日、「ほっとタイムス」というかわら版を配りました。その中に、「遊びを通して、子供に生きる力の柱である豊かな情操や発想力、直観力や危機回避能力が養われる」という内容が書いてありました。再度読まれました、お子さんと遊びについて、考えてみられるのもよいと思いました。

朝に、月が...

9月27日（月）

登校後の朝の自由時間。いつものように、秋冬野菜に水をかけるために、じょうろに水を入れ、玄関前を歩いていた子供たち。

ふと、空を見上げたAさんが、思わず「朝なんに、つき、出とる」と、驚いて叫びました。思ったことを瞬時につぶやくAさんのすてきさが、みんなに波紋を投げかけていきました。

9月28日（火）

「今日の朝も、月が見えた」とOさんやAさん。ほとんどの子供が、月の話をしたそうだったので、朝の時間から、「くらしのたしかめ」に変更しました。「月」と黒板に書くと、どんどん手が挙がってきました。

「朝なのに、月が出ているなんて不思議だ。なんで、朝に出ているの」とSさん。

「月は夜にしか出ないのに。朝なのに、なんで白い月が出るの」とHさん。「月は夜に出るもの」「月は、黄色いもの」という自分の当たり前が、朝に白い月が出ているという自然現象を目の当たりにして、驚いたのでしょうか。

「朝なのに、白い月が出ていて、ひっくり返りそうになった」とKさん。いつも自分の気持ちを素直に表現しながら、みんなの話に加わってきました。

「月は、夜出るはずなのに、おかしい」物知りで、自分の説に自信をもっているHさん。再度、自分の思考で判断しきれない朝の月に、納得しませんでした。目の前に突き付けられた事実（＝朝の月）があるにもかかわらず、自分が納得できないことに対しては、簡単に「YES」と従わないHさんのしぶとさが輝きます。

「夜にしか、月は見られないはずなのに」とOさん。夜に、自分の家で見た月と比べて、Hさんと同じく、納得しませんでした。月を自分の目で見たことが、自分の考えをしっかりと後押ししているのですね。

最後に、「夜は、月しか出ないのに、朝は、太陽も月も出ている。朝だけ2つとも出ているのは、おかしい」とKさん。太陽も月も、星として条件は同じなのに、月だけがどちらの時間帯にも出ているのはおかしいと比べて考えたのでしょうか。

9月29日（水）

朝の会の後、下弦の月を見たいと子供たちが言うので、グラウンドに見に行きました。8時半近くなのに、白い月が空の中央付近に出ていました。「あった。あった」と喜びながら、みんなで白い月を眺めました。そのうちに、雲梯につかまり、月に近付こうとするMさん。砂山に上って、月を見ようとMさん、Tさん、Rさん。月から離れるために、校舎から離れた場所に移動して月を見ようとするTさんやSさん。場所を変えることで、月の見え方が変わらないか自分の目で確かめていました。



教室に戻ると、「白い月でも、ウサギがもちをついていた」と言うKさんやHさんに対し、「そんなんは、見えなかった」と主張する男の子たち。今度は、月の中のウサギを見るのでしょうか。子供たちの知的好奇心は、どんどん膨らんでいきます。

この便りが配られるのは、三日月が南西の空に見えている頃でしょうか。

何気ない日常のくらしの中の自然に対する感性豊かなAさんのつぶやきが、こんなにも子供たちの学びを広げてくれるなんて、Aさんに感謝でいっぱいです。

そして、これからも、子供たちのすてきな言葉を拾い集めながら、豊かな自然から多くのことを学んでいきたいと思いました。